

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：13801

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24700247

研究課題名(和文)「思い出」を生かした東日本大震災からの復興のまちづくり

研究課題名(英文)Based on memories, how to rebuild the town damaged by 3.11 Tsunami disaster.

研究代表者

吉田 寛(YOSHIDA, hiroshi)

静岡大学・情報学研究科・准教授

研究者番号：30436901

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、震災からの復興において求められる復興ガバナンスとは、その当事者たちの「思い出」を言語や表現、活動を通じて紡いでいく過程であることを明らかにした。24年～25年にかけての、東日本大震災被災地である山元町復興への参与的な活動において、復興における被災コミュニティの再結合、合意形成、計画立案過程において「思い出」を担った言語の必要性が示された。26年には、この知見に基づいて、ガバナンス理論の権威であるUCバークレー校のBevir教授のもとで理論的研究を進め、ガバナンス・ストーリーの解釈・言語化が、ガバナンスの成否を握るファクターであることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study point out the key for the governance to rebuild the town damaged by disaster is to synthesis of memories using citizen languages, expressions, and activities. I got this idea from activities in the small town in Tohoku during 2012-2013, and from theoretical research in UC Berkeley in 2014.

研究分野：社会情報学、哲学

キーワード：ガバナンス 復興 まちづくり 震災 参加 解釈 コミュニティ 合意形成

1. 研究開始当初の背景

研究を立案した 2011 年の秋、東日本大震災で大きな被害を受けた多くの市町村では、自衛隊らによる救助の生命フェーズ、避難所等での生命維持のフェーズを経て、仮設住宅などを利用しつつもとの生活を取り戻すための復興のフェーズになっていた。他方、阪神大震災からの復興の分析から、復興は町と住民が主体となった活動でなければ形だけの寂しいものになってしまうことが意識されていた。

私自身は震災以前から、まちづくり等の領域を中心にガバナンス論の研究を進めていた。ガバナンス論において、最も重要な要素はガバナンスの諸アクター（関係行為者）の参加と協調であり、そのための考え方やしくみを、阪神淡路大震災の復興の歴史やまちづくりの成功事例などから明らかにしてきた。とくに、地域住民などの当事者であるアクターが主体的に参加するためには、行政からだけの働きかけだけでなく、当事者がある程度のリテラシーを持って記録を取り行政等のアクターと交渉しつつ、ガバナンスに参加することが必要であると考えられた。

今回の震災においても、比較的早い時期から復興における住民の参加や合意形成が重要な課題として指摘されており、政府の復興構想会議においても重要な課題の一つとされていた（復興への提言～悲惨のなかの希望～、平成 23 年 6 月 25 日、東日本大震災復興構想会議、原則 2）

ただ、これまでの人生で積み上げてきた多くのものを失った被災者がまちの復興に積極的に関わることは、震災で受けた生活状況だけでなく精神的なダメージを考えるなら、それは決してたやすいことではない。それが被災地支援活動を経験するなかで私が懸念する点であった。また、住民主体の復興を支援するためには、何が必要なのか、それが明らかではないままに、政治・行政主導の復興計画が推し進められようとしていた。こうした状況において、被災したまちや被災者ひとりひとりの生活の「記憶」あるいは「思い出」こそが、被災地の住民が復興のまちづくりに参加し、主体的にまちを育てていくための大きな力の一つとなるのではないかと私は考えはじめていた。

私は、社会情報学会（JSIS：当時）の研究仲間と共に、2011 年より被災地である宮城県山元町の復旧・復興支援活動に参加していた。私たちの主な活動内容は、避難所のインターネット支援（2011 年 5 月ごろまで）、山元町災害臨時 FM 局（現在は町のコミュニティ FM として継続）の情報支援、そして被災写真の洗浄・デジタル化・返却活動であった。2011 年は、現地の緊急のニーズに対応して活動のセットアップ、遂行に追われていた。しかし、2012 年度以降には、今後の災害や社会活動のために、こうした活動を記録として残し、活動から新たに発見した知見を学術的

に整理して示していかなければならないという意識が、学会や支援活動仲間の中で高まっていた。本研究は、こうした意識に基づいて構想された。

2. 研究の目的

本研究では、こうした「記憶」あるいは「思い出」を生かした復興支援という着想を実践的に推し進めると共に、その過程を分析・評価して、まちづくり研究の領域における有益な知見としてまとめることを目指した。

現在、地方創成のかけ声のもと、日本各地では歴史的建造物などをまちづくりの中核に据える取り組みが多数試みられている。浜松近辺でも、江戸時代の関所を生かしたまちづくりや、戦災を潜り抜けた建物を生かしたまちづくりが模索されており、筆者もそのいくつかに関わってきた。だが、その理論的ないみは必ずしも明らかではなかった。「記憶」のいみは「やっぱり町の象徴になる建物だから」という形でインフォーマルに語られてきた。こうしたインフォーマルな語りは示唆に富んでいるものの、まちづくりに関する知見としては曖昧なものにとどまり、一般化して理解するのは難しい。

山元町においても、被災写真の返却プロジェクトを推進するなかで、「思い出」「まちの過去」についての多くのインフォーマルな語りや知見が交換され、蓄積されつつあった。こうした記録を残すことは、次の災害や社会活動に向けての社会的に意義のあることであると考えられたが、同時にそこから得られる実践的な知見を、ある程度整理され一般化可能な学術的な知見としてまとめる大きな必要性を感じ、これを本研究の課題とした。

従って本研究は、山元町支援の経験から「思い出」や「記憶」のいみについての確かな言葉・理論を与えることで、まちづくりや復興ガバナンスの推進に理論的、学術的に寄与することを目的とするものであった。

3. 研究の方法

宮城県山元町の復興支援活動と並行・連携しつつ、「思い出」のいみに着目してまちづくり研究を行った。

復興支援活動としては、「りんごラジオ」の情報支援、被災写真の返却・共有プロジェクトを継続しつつ、被災地のニーズに注意して、「山元復興学校」「山元町パソコン愛好会」といった住民を対象としたリテラシー教育・学習の支援活動を展開した。

2012 年度は被災写真のデータ化や返却プロジェクトの支援を続けた。2011 年度から継続するこの活動は、町内の流出した約 70 万枚の被災写真のうち、3 割程度を被災者本人に返却するなど、大きな成果を挙げた。これに対して、「キッズデザイン賞 復興支援デザイン賞」を受賞した。

2012 年度はこれに並行して、復興の当事者としての町の人々をエンパワーする発想

で、町との合同事業としてパソコン教室「山元復興学校」を企画、運営した。この活動は2013年度以降の町の住民が主体となった「山元町パソコン愛好会」の活動へと展開した。こうした活動に対しても、2011年度に続いて「キッズデザイン賞」、そして社会情報学会（SSI）より「社会貢献賞」を受賞した。

こうした実践的な支援活動の成果をまちづくり研究の観点から検証・分析して、復興のまちづくりにおける「思い出」や「記憶」の保存や共有、こうしたものをめぐるコミュニケーションのいみを明らかにした。2012年-2013年は、国内の学会や研究会で理論的検討を進め、その成果を集約して、『「思い出」をつなぐネットワーク』（柴田・吉田他編著、昭和堂、2014年）にまとめた。同書は、社会情報学会から「優秀文献賞」を受賞した。2014年度には、復興に関わるガバナンスや合意形成について理論的に深めるため、アメリカ UCバークレーに滞在して、ガバナンス理論の権威である M.Bevir 教授のもとで文献研究を進めた。

こうした成果は、その都度、学会大会やシンポジウム等の機会に発表し、学会誌等にも掲載し、継続的にコメントをいただきながら研究を展開した。また、『「思い出」をつなぐネットワーク』の出版に向けた共編著者は、被災地での復興活動の協力者でもあり、同書出版に向けた彼らとの執筆者会議、編集会議が、率直な意見交換、相互批判とアドバイスの場となった。

4. 研究成果

上記の研究活動によって、「記憶」や「思い出」を単に保存するだけでなく、共有したり交換したりする場が、復興にとって大きな力になるのではないかとということが分かってきた。

記憶や思い出は、それ自身が他者との関係性を含んでおりネットワークを表現するものであるが、同時に、それについて交換すること自体が新たなネットワークを生み、そして新しい活動と新しい思い出、そして物語を生み出していく契機なのである。被災地の復興において、記憶や思い出は、単に過去を懐かしむだけでなく、現在の活動と未来の物語を共同で作り出していくための大切な資源なのである。

また、こうした研究と活動を進めていくなかで、復興ガバナンスにおいて言葉の持つ役割の重要性が浮かび上がってきた。復興に限らず、まちづくり、その他のガバナンスにおいても、そのプロセスは、計画 実行 評価という、いわゆる PDCA サイクルに沿って進む。ガバナンスの場合ではとくに、計画とは、参加者による合意形成過程であり、参加者の多様な言葉のすり合わせによってあるビジョンが言葉化されるプロセスといえる。またその計画の実行過程も、ガバナンスにおいては言語化された計画を多様な

アクターが解釈して実現していく過程であり、自律的なアクターの協調性を確保する重要な鍵は、この解釈の相互理解や相互交渉による協調である。評価についても、同様の状況が考えられる。従って、こうした合意・実行・評価のプロセスにおいて、言葉をいかにすり合わせて協調的に用いるかがネックになることが分かってきたのである。

特に被災地の復興のまちづくりにおいては、住民と行政、そして施工を担う業者、それらを取りまとめるコンサルタント役といったアクターの言語は相互に大きく隔たりが見られた。こうした隔たりは、復興の当事者である住民が、まちづくりの物語形成に参加する上での致命的な障壁になってしまっているように思われる。今後の、復興計画の行政的な実施に止まらず、復興計画として物語化された「まち」の最終的な実現に向けた取り組み、そして、実際のまちの復興について、こうした観点から注意深く観察を続け、評価していく必要があるだろう。

今後は、こうした観点から、被災地にも足を運んで復興の行く末を見守るとともに、情報社会における言葉と物語のガバナンスについて、より一般的な問題領域に議論を展開していく。同時に、意味のすり合わせ、合意形成、物語の共有、物語の解釈といった、ガバナンスにおける言語的な現象について、言語哲学等の知見に基づき、さらに理論的に理解を深めていく必要があると考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計6件)

吉田寛、「世界表象としてのビッグデータとビッグデータ・ガバナンス ～局所表象と分散表象の観点から～」(2014年総会シンポジウム「ビッグデータの可能性と課題 監視・シュミレーション・プライバシー」論文)、『社会情報学』第3巻3号、査読無、2015年、pp.113-126

一力雅彦・高野明彦・正村俊之・田中淳・吉田寛・橋元良明、「震災3年目の社会情報学」(シンポジウム報告：2013年社会情報学会(SSI)学会大会シンポジウム1)、『社会情報学』第3巻3号、査読無、2015年、pp.64-86

吉田寛、「危機の時代とリアリティに基づく言葉」(誌上シンポジウム『危機と人間』岡田安功、吉田寛、原田伸一郎、田中枝子、中尾健二)、静岡大学情報学研究(静岡大学)19号、査読無、2014年、pp.43-55

吉田寛、「『涼宮ハルヒ』の独我論」、『情報学研究』18号(誌上シンポジウム『涼宮ハルヒの憂鬱』)2013年、pp.59-66

【翻訳】吉田寛、渡部春佳、若杉美奈子、守博紀、「公共政策」(M. Bevir, 2007, "Public Policy" in Public Governance, Vol. 3, Sage, pp. vii-xxiv)、『情報学研究』、18号、査読無、2013年、pp.79-99

吉田寛、「東日本大震災におけるボランティア実践」、『横幹』、第6巻第2号(ミニ特集「社会情報学の視点による東日本大震災からの復旧・復興」)、査読無、2012年、pp.65-70

〔学会発表〕(計6件)

吉田寛、「ビッグデータ・ガバナンス」第5回横幹連合総合シンポジウム「日本発：モノ・コト・文化の新結合」、2014年11月29日、東京大学(東京都文京区)、『シンポジウム予稿集』横断型基幹科学技術研究団体連合、2014年、pp.92-95)

吉田寛、「世界表象としてのビッグデータ」2014年SSI総会シンポジウム「ビッグデータの可能性と課題 監視・シュミレーション・プライバシー」、2014年6月14日(土)、中央大学駿河台記念館(東京都千代田区)

亀井祥史、吉田寛、「学内カフェを足掛かりとした学術的「公共性」の形成 -静岡大学図書館カフェの活動より-」、『情報学ワークショップ(WiNF)2013』、2013年12月1日、愛知工業大学(愛知県名古屋)、『WiNF2013発表論文集』pp.140-145)

吉田寛、「災害情報ボランティアの可能性 『思い出サルベージアルバム・オンライン』の活動より」(柴田邦臣・吉田寛・服部哲・松本早野香連携報告『「思い出」をつなぐネットワーク 山元町被災地支援活動からの社会情報学』)、2013年度社会情報学会 研究大会、2013年9月15日(日)、早稲田大学(東京都新宿区)、『2013年社会情報学会(SS1)学会大会 研究発表論文集』、pp.245-248)

中谷勇哉、吉田寛「インターネット上のコミュニケーションにおける「自己」の形成と「同一化」概念」応用哲学学会第4回研究大会、2012年4月21日、千葉大学(千葉県千葉市)(予稿集、pp.25-26)

吉田寛、中谷勇哉「東日本大震災後のボランティア論の内在的分析」応用哲学学会第4回研究大会、2012年4月21日、千葉大学(千葉県千葉市)(予稿集、pp.23-24)

〔図書〕(計1件)

柴田邦臣、吉田寛、服部哲、松本早野香編著、『「思い出」をつなぐネットワーク 日本社会情報学会災害情報支援チームの挑戦』昭和堂、2014年、第2章「写真洗浄・デジタル化の活動を作る つながりを生み出す

IT」pp.58-123、第5章第1節「危機と復興 意味の喪失と創造的再生」pp.223-248を担当

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕(受賞4件、研修1件)

【受賞】社会情報学会(SS1)2014年度「優秀文献賞」(共編著者と共同受賞)、『「思い出」をつなぐネットワーク』(柴田邦臣・吉田寛・服部哲・松本早野香編著、昭和堂、2014年)に対して、2014年9月20日

【受賞】25年度社会情報学会「社会貢献賞」(社会情報学会表彰委員会)受賞、2014年9月、24年度の山元町復興支援活動「山元復興学校」(代表：服部哲・吉田寛)の活動に対して

【受賞】「第7回キッズデザイン賞」(～復興支援デザイン部門～)(主催：特定非営利活動法人キッズデザイン協議会 後援：経済産業省)受賞、2013年7月「受賞番号130221f8 中学生が先生になる！被災地でのパソコン教室」団体(山元町教育委員会/ニフティ株式会社/社会情報学会・災害情報支援チーム/富士通株式会社)(24年度に吉田が企画・参加していた山元町復興支援活動「山元復興学校」に対して)

【受賞】「第6回キッズデザイン賞 復興支援デザイン賞」(～復興デザイン部門～)(主催：特定非営利活動法人キッズデザイン協議会 後援：経済産業省)受賞、2012年7月、「受賞番号120136f8 津波で流出した写真の復元によって、人々の「絆」を蘇らせるプロジェクト ～未来に向かって羽ばたくための足場はここに。思い出の復元は故郷との絆の復元～」団体(ニフティ株式会社/日本社会情報学会・災害情報支援チーム/富士通株式会社)23年度に吉田が副代表を務めた社会情報学会の被災地支援活動(写真洗浄、データベース作成、返却)に対して

【海外研修：静岡大学】吉田寛、平成26年度教員特別研修(UCバークレー、Visiting Scholar in Department of Political Science)、2014年4月-2015年3月、ガバナンス研究・震災復興研究

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 寛 (YOSHIDA Hiroshi)
静岡大学・情報学研究科・准教授
研究者番号：30436901